

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：33801

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K13193

研究課題名(和文)身体と言語に関する研究 - 「書」と書論の記号学的分析を通じて -

研究課題名(英文) Research on body and language: Semiotic analysis about the "Sho" and the theory about Sho

研究代表者

古市 将樹 (FURUICHI, MASAKI)

常葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：30557301

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：書の教本である尊円親王の『入木抄』を理論的・実証的に分析した。理論的分析としては、同書では、言語だけで、書の実践が説かれている。そのための工夫を記号学の知見を用いて分析した。また、そこには能書の書を学ぶことが強調されており、能書の判断基準や継承過程も明らかにする。実証的には、なるべく『入木』当時に近い書道具を調査・研究して入手、それらを用いた試作をおこなうことで、理論的分析の裏付けを試みた。

研究成果の概要(英文)：On this research I tried theoretical and practical analysis of "Jyuboku-shou", teaching text of Japanese calligraphy by Prince Son-en. In theoretical analysis, the text was described only in the language for practical writing of the "Sho" and I analyzed the ingenuity for that using knowledge of semiology. Also, there is emphasis on learning "Sho" written by the "Nou-sho(calligraphy master)", I will clarify the judgment standards of "Nou-sho" and succession process of that. In practical analysis, I tried to support that theoretical analysis by studying and researching the writing tools close to the time of "Jyuboku-shou" as much as possible, and obtained the tools to use them for trial writing.

研究分野：教育学

キーワード：身体と言語 入木抄 尊円親王 書 書論 三筆・三蹟 記号学 ロラン・バルト

## 1. 研究開始当初の背景

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(平成20年1月)によって、言語が「知的活動(論理や思考)の基盤であるとともにコミュニケーションや感性・情緒の基盤でもある」と定義された。それ以来、学校教育において、「言語活動の充実」が推進され、従来よりも表現や発表の機会を多く取り入れた実践的な教育が試みられている。

一方、今から600年以上前の南北朝時代に、尊円親王は書の教本といえる『入木抄』を著している。これは、筆の持ち方、稽古の仕方、書を学ぶ意義や心構え、書道具に関すること、日本の書の歴史など、書について体系的に論じられており、書道史上重要な資料と評価されている。しかし、『入木抄』はもともと口承によるものであり、そこには師匠が傍らにいて筆を持って手解きをするような実践がない。

書では、一般性・普遍性を有する共通コードとしての言語(文字)を用いながら、個性的な表現がなされ、ここに身体性が投影されているといえるであろう。そのような書を学ぶこと論じながらも、直接的な実践をとまなわれない『入木抄』を教育論として分析することは、教育課題としての「言語活動の充実」の具体的な在り方を創案するのに、さらには教育の言語の特性を明らかにするのに資するのではないかと考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究では、教育や学習において、言語が身体と不可分の関係にあることを明らかにしたい。具体的には、当然のことのようにおこなわれている、言語を用いて言語を教えたり学んだりすることは可能なのか、もしそうであればどのように可能なのか、そこには情報伝達的な行為以外にどのような行為的な

意味があるのかなどのことである。そして、言語にいかに関係が反映されるか、身体にいかに関係が影響しているかなどを、教育学の見地から分析することで、最終的には、「言語活動の充実」のための教育を考案・創案することを目的としている。

## 3. 研究の方法

本研究は、理論的研究と実証的研究から構成されている。

### (1) 理論的研究

『入木抄』に関する日本の書道史上の位置づけ。

先行研究をもとに、いくつかの異本がある『入木抄』のどれを主な分析対象とするか決定することと、これまで同書が、日本の書道史上どのように評価されてきたのかをまとめる。

『入木抄』のテキスト分析。

ロラン・バルトの記号学において、彼が用いた、ラング/パロール、シニファン/シニフィエ、エクリチュール/パロール、身体/言語、デノタシオン(メッセージ)/コノタシオン(メタ・メッセージ)、教養/方法、さらに、レトリックなどの分析的な諸概念を整理し、それらを使った『入木抄』の分析。

記号学の知見を用いた『入木抄』の構造分析。

言語だけで実践を説く『入木抄』にはどのような工夫がなされているのかを明らかにするべく、同書の全体的な構造を分析する

### 能書に関する研究

『入木抄』および同時代のその他の書論から、手本とすべき能書をリスト化し、なぜこれらの書が手本とされたのかを、資料をもとに、概念形成史的に分析。

### (2) 実証的研究

真筆の実地調査。

分析用に、真筆のできるだけ細密な画像を

入手するとともに、可能な限り展示会などで実物を実地調査する。

書道具の調査と入手。

『入木抄』では筆・料紙・墨・硯などの選び方についても言及されているのだが、そこには結論的な記述しかなく、テキスト分析がむずかしい。また、たとえば現在一般的な水筆に対して昔は巻筆を使っていたなど、当時の書道具が現在のそれらと質や構造が異なっていると予測されることから、なるべく当時の道具類を明らかにし入手する。

試作。

入手できた書道具を用いて能筆の書の臨書をおこない、現在の道具を用いた場合との違いをデータとして収集する。この作業は、日常的に仕事として書を能くする研究協力者に依頼する。

真筆の画像解析。

従来先行研究では、研究手法として、真筆の比較検討がおこなわれてきた。本研究では、それに加え、画像のデータ解析をおこない、能書の特徴の可視化を試みる。

#### 4. 研究成果

以上の研究から、今後の課題を含め、明らかになったことは以下の通りである。

##### (1) 『入木抄』の構造

たとえば『入木抄』の「第一条 筆の持ち方について」は、「お稽古のはじめから、取り定めをしておくべきです。変な癖がついてしまったら、後から直すことは難しくなるでしょう。筆の持ち方は、中指の両節の中央に筆を置いて人差し指のそばに親指をおきま。薬指と小指の二本は握らないでそっと添えるような形にして、中指の後に続いていればよいでしょう。〔中略〕最初は馴れませんが、段々と馴れてくるでしょう。これを基本として、筆遣いが自然によくなります。筆を悪くとれば、その理論に伴って字も悪くなるでしょう。その先、いくらでも巧みな筆遣い

になっていくでしょう。』（赤井達郎校注『入木抄』（『日本思想史体系 23 古代中世芸術論』岩波書店、1973年、250～251ページ）の現代語訳）となっている。この中で、はじめにある「お稽古のはじめから、取り定めをしておくべきです。変な癖がついてしまったら、後から直すことは難しくなるでしょう。」の部分は、筆の具体的な持ち方を指導するそれ以下の文とちがって、正しい持ち方を覚えることの大切さを説く文である。つまり、この部分では、それ以下の文の意味付けがおこなわれているのであり、それは、以下のメッセージの読み方を説くメッセージである、メタ・メッセージ（コノタシオンとデノタシオンの関係）に相当する。このように、基本的には言語（パロール）だけで、具体的な「書」（ラングやエクリチュール）の優れている点や揮毫の仕方を評したり説いたりする書論には、教える上での工夫が散見された。

##### (2) 「能」の概念形成過程

能書の書がどのように評価され伝えられてきたのかを資料から分析したところ、収集できた明治期以前の資料はまだ数が少ないため過程として記すことはむずかしいが、大正期以降については、たとえば空海の「風信帖」に対しては「卒意」が頻繁に使われていたように、特定の評価のための言葉がある期間普及し、しばらくすると別の言葉にとってかわるような状況が確認できた。それらの資料には、図版が添えられていないものもあり、この場合は、言葉だけで価値付けがなされていることになる。

##### (3) 能筆の判断基準

能書とされた人物は40名強いる。後の資料には、それぞれの優れた点が記されているものもあるが、『入木抄』では空海・小野道風・藤原佐理・藤原行成については語られているものの、それ以外の能書については詳細に記されていない。能書の中で、空海・嵯峨天皇・橘逸勢・小野道風・藤原佐理・藤原行

成は後に三筆・三蹟と称されることになるが、なぜこの6名が別格扱いなのかが不明であり、能書として認められる基準が明らかになっていない。

#### (4) 書道具について

その多くは消耗品であり、かつ資料もあまり残っていないため、分析することがむずかしいと予想できるが、現在、書道具についての研究はあまり進んでいない状況にある。しかし『入木抄』において、書道具に言及されている部分は、なるべく当時のものを用いなければ、その意味を図りかねる。特に、同書には「筆仕い」という表現がある。この「仕」が正しければ、同書においては、言語と身体の間に関係を介したアフォーダンス的な関係が想定されていたからとも考えられ、書道具の研究の必要性は高い。

#### (5) 書の目標について

『入木抄』には、能書の目標が「うるはし」い書の揮毫であることを明確に記している。そして同書は、その目標に向けて、筆の扱い方や稽古の仕方、書道具の選び方などが語られる、書の体系的な教本となっている。一方、現在の書の教本では、「書の美」のような記述はあるものの、より明晰な美的価値観を示す言葉を見ることは少なく、技術的に「上手い字」が目標とされているかのようでもある。これは、書の目標が多様化しているからとも解釈できるが、少なくとも、1950年代の書道雑誌には、書の美を西洋美学の観点から分析しようとする動きが確認できた。目的論がはっきりしない教育論は考えにくい。「うるはし」に相当する現在の目標は何なのか、もしそれが無いとすれば、いつ頃からそうなっているのかも調査・検討する必要があるであろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

(1) 古市 将樹、言葉による教育の原理および方法に関する研究 『入木抄』を中心とした書論の記号学的分析を通じて 「能」を示す評価の言葉 空海「灌頂歴名」、常葉初等教育研究、査読無、第3号、2017、pp.71 - 82

(2) 古市 将樹、言葉による教育の原理および方法に関する研究 『入木抄』を中心とした書論の記号学的分析を通じて 「能」を示す評価の言葉 - 空海「風信帖」 -、常葉大学教育学部紀要、査読無、第38号、2017、pp.361 - 373

[https://tokoha-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=1498&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=39](https://tokoha-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1498&item_no=1&page_id=13&block_id=39)

(3) 古市 将樹、言葉による教育の原理および方法に関する研究 『入木抄』を中心とした書論の記号学的分析を通じて (2) パルトの諸概念と教育論、常葉大学教育学部紀要、査読無、第37号、2017、pp.43-55

[https://tokoha-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=1282&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=39](https://tokoha-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1282&item_no=1&page_id=13&block_id=39)

(4) 古市 将樹、言葉による教育の原理および方法に関する研究 『入木抄』を中心とした書論の記号学的分析を通じて (1) 本研究の問題意識、分析対象や研究方法について、常葉大学教育学部紀要、査読無、第36号、2016、pp.157 - 174

[https://tokoha-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=56&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=39](https://tokoha-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=56&item_no=1&page_id=13&block_id=39)

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

古市 将樹 (FURUICHI, Masaki)

常葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：30557301

### (4)研究協力者

後藤 祐月 (GOTO, Yudoku)